

今週の為替相場見通し(2023年5月1日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		133.01 ~ 136.56	136.34	134.00 ~ 137.50
ユーロ	(ドル)		1.0960 ~ 1.1096	1.1017	1.0900 ~ 1.1300
(1ユーロ=)	(円)		146.33 ~ 150.40	150.08	148.00 ~ 153.00
英ポンド	(ドル)		1.2388 ~ 1.2583	1.2569	1.2400 ~ 1.2800
(1英ポンド=)	(円)	*	165.43 ~ 171.18	171.11	166.00 ~ 171.00
豪ドル	(ドル)		0.6573 ~ 0.6705	0.6617	0.6580 ~ 0.6705
(1豪ドル=)	(円)	*	87.87 ~ 90.22	90.17	89.50 ~ 91.40

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

(1) 今週の予想レンジ: 134.00 ~ 137.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

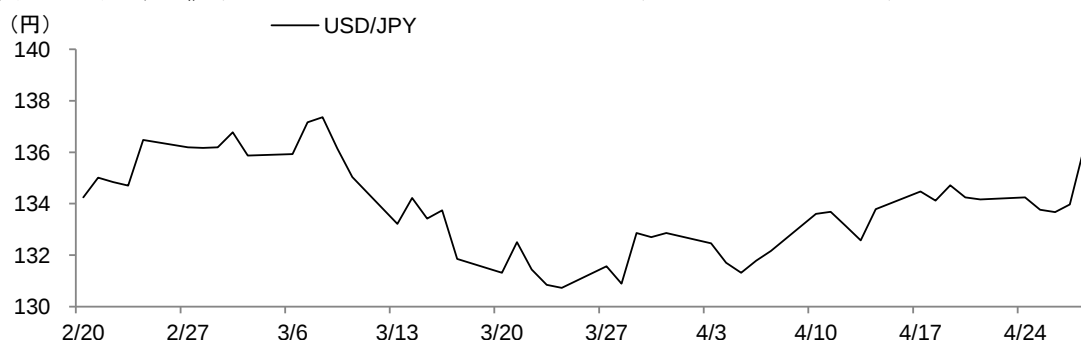
先週のドル/円相場は、週末に日銀金融政策決定会合の結果を受け急上昇する展開。週初24日、133.97円でオープンしたドル/円は、植田日銀総裁の金融緩和維持を示唆する発言が材料視され134.72円に続伸も、その後は軟調な米経済指標を受けた米金利低下も相まって134円台前半に値を戻した。25日、ドル/円は材料に欠ける中、134円台前半でレンジ推移。海外時間は、米中堅銀の期待外れな決算内容を受け金融システム不安が再燃、米金利低下とともに133円台半ばに下落した。26日、ドル/円は133円台後半で揉み合い。海外時間は、リスクオフ地合いの中、米金利低下に追従し133円台半ばをじり安推移。米3月耐久財受注(速報)が堅調な結果となると一時134円を目指し上昇も、リスクオフムードの中で米金利は続落、一時週安値となる133.01円まで下押した。27日、ドル/円は米金利上昇に合わせ133円台後半でじり高推移。海外時間は、一時133円台前半に反落も、米1~3月期コア個人消費支出(PCE)デフレーター(速報)が市場予想を上回る伸びを見せ、一時134円台前半まで反転上昇した。28日、日銀金融政策決定会合では、現行の金融緩和策の維持を決定。植田総裁会見でも同様の見方が示され円売りが進行し、海外時間にかけて135円を上抜け。その後も勢いは止まらず136円台を示現すると、米3月PCEコアデフレーターの上昇などを背景に136.56円と週高値を更新し、高値圏のまま136.34円で越週した。

今週のドル/円相場は、本邦連休を挟む中、主要中銀会合への思惑からボラタイルとなりつつ、上値を試す展開を想定。日銀会合では金融緩和策の維持を決定し、燦っていた修正期待は挫かれ、円売りが加速する展開となった。短期的には日銀と海外中銀の金融政策の乖離から円が売られやすく、ドル/円は上値を試す展開を想定する。なお、日銀会合と植田総裁の会見内容を通して受けた印象は中立的。経済動向の見極めと、金融政策の検証を進め、限られた任期で効果的な金融緩和策を繰り出す為の助走期間に入ったとも捉えられ、バランスの取れた内容だった。四半世紀にわたって行われた金融政策の検証については、1年~1年半程度の時間をかけてレビューを実施するとしつつも、期間中の政策変更の可能性も否定せず。また、これまでの「長短金利の水準、または、それを下回る水準で推移することを想定」といったフォワードガイダンスも廃止し、より柔軟な対応に向けた布石を打った。もっとも、年央にかけての即座の金融緩和修正期待は後退し、目下利上げを見込む欧米中銀とのスタンス乖離から今週のドル/円は上昇がメインシナリオとなろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/24~4/28)の値動き:

安値 133.01 円 高値 136.56 円 終値 136.34 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第一チーム 松木 悠馬

(1) 今週の予想レンジ: 1.0900 ~ 1.1300 148.00 ~ 153.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ相場は、米独金利差縮小を受け上昇し、年初来高値を更新した。週初24日、1.0992でオープンしたユーロ/ドルは、独4月IFO企業景況感指数の強い結果を受け独金利は上昇、1.10台半ばへ上昇した。25日、ユーロ/ドルは、金融不安が再燃する中で独金利は急落し、1.0965に反落した。26日、ユーロ/ドルは独5月GfK消費者信頼感が市場予想を上回ったことがユーロ買いに繋がり、13か月ぶりの高値となる1.1096に上昇した。引けにかけては米金利の反転上昇で1.10台前半に値を戻した。27日、ユーロ/ドルは、米1~3月期コア個人消費支出デフレーター(速報)が市場予想に対して上振れインフレリスクが再確認されたことや米新規失業保険申請件数の良好な結果を受け米金利が上げ幅を上げたことを背景に一時1.10を割り込んだ。28日のユーロ/ドルは、東京時間に植田日銀総裁になり初の日銀金融政策決定会合が開催されたが、ユーロ/ドル相場への影響は限定的となった。海外時間には、独4月消費者物価指数(速報)が弱含みインフレ高進懸念が後退したことや、ユーロ圏1~3月期GDP(速報)が市場予想を下振れたことを背景に1.0963まで下落。下げ一巡後はユーロ/円の大幅上昇にも支えられ1.10台を回復。結局1.1017で越週した。

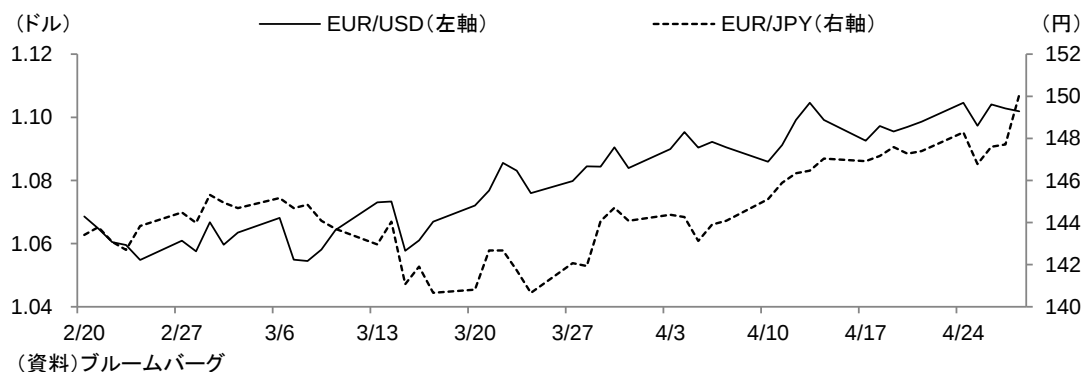
今週のユーロ相場は週央にECB政策理事会とFOMCを控えタカ派ECBとハト派FRBのスタンス明確化がサポート材料となり堅調な推移を予想する。ECBでは利上げ幅が+25bpと+50bpで予想が割れている。ユーロ圏3月消費者物価指数(HICP)では肝心のサービスインフレが前月対比で上昇。2日(火)に発表されるユーロ圏4月HICP(速報)が強含めば、市場では+50bpの利上げを織り込みに入くと予想する。ただ、仮に+25bpの利上げとなり前回会合から利上げ幅の縮小をした場合においても、利上げ幅の如何に関わらず、利上げスタンスを継続するのがメインシナリオでありユーロ相場には上昇圧力となろう。一方で、FOMCではFRB高官の発言もあり足許のマーケットでは5月FOMCにて+25bp利上げがほぼ織込まれている。ただ、米地銀破綻以降、利上げの実体経済への影響が露わになったこともあり、今回はサプライズなく+25bp利上げを実施したとしても、今後暫くの間政策金利の据え置きが予想されドルの上値を抑えるだろう。対円でのユーロ相場についても同様の展開になろう。先週末の植田日銀総裁初の日銀政策決定会合では現状維持が発表された。足許は2014年以来の高値圏を超える150円台で推移している。日銀の政策修正期待も後退した今、円買い材料は乏しい為、この流れは継続すると予想する。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(4/24~4/28)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0960 高値 1.1096 終値 1.1017

(対円) 安値 146.33 高値 150.40 終値 150.08



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 将行

(1)今週の予想レンジ: 1.2400 ~ 1.2800 166.00 ~ 171.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドルでは週末に1.25を上抜ける展開。一方、対円では28日に植田総裁が就任して初となる日本銀行の金融政策決定会合で、金融緩和継続の方針が明確に示され円安・ドル高が進行したことを受けて、昨年11月以来となる170円台に到達した。対ドル相場に関しては、英国内では目立った材料がないなか、米経済指標の動向に左右される形で英ポンドも上下に動く展開となった。前週の21日の夜に発表されたS&Pによる英国債の格付け見通し引き上げもあり、週明け24日にポンドは上昇した。しかし、25日に対ドル1.25に今月3度目のトライをした後は、1.24まで一転して反落した。27日には米1～3月期GDP(速報)が発表され、ヘッドラインの数値こそ前期比年率+1.1%と10～12月期の同+2.6%から伸び率が鈍化したものの、内訳を見ると個人消費の急加速となっていたことが意識される形でドルがグローバルに反発。28日には米銀行株の上昇などを受けたユーロ/ドル上昇に追従する形で1.25を突破して週末を迎えた。

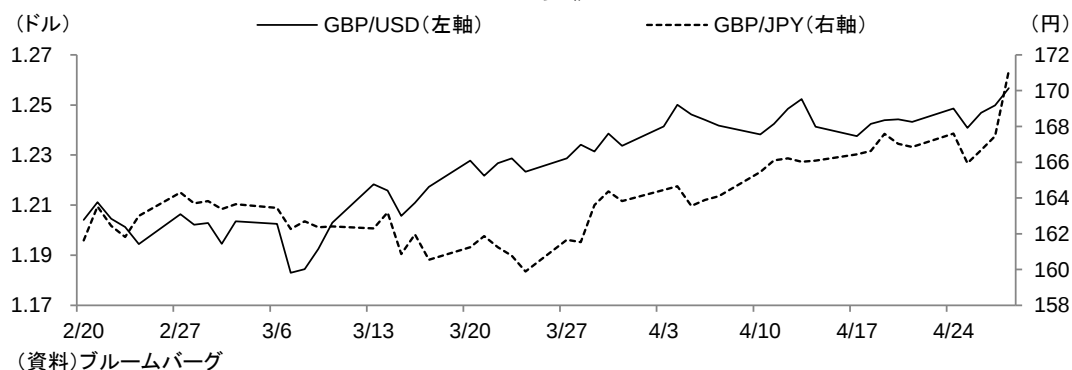
今週の英ポンド相場は、3日(水)に控えるFOMCのコミュニケーションによって、その後の為替市場の動向が大きく左右される可能性があるものの、基本観として英ポンドの対ドルでの上昇を見込んでいる。(1)英国の賃金・インフレ指標の上振れに伴う英金利の上昇に伴い、英国と米国の2年金利差は縮小した一方、英ポンドの対ドルレートの値動きは限定的に留まっており、金利に値動きに寄せる形で英ポンドが上昇する余地は残っていると見られること、(2)米商品先物取引委員会(CFTC)が公表しているポンドのポジションでは、売り越し額が昨年9月以降、縮小を続けていること、が理由である。ポンドは4月以降、対ドル1.25が上限となっているが、ここを上抜けた今、さらなる上昇余地がある。英国の経済指標では、2日(火)に公表される4月全国住宅価格に注目している。住宅価格は経済の体温とも言える指標だけに、底入れの兆しが強まれば、英国経済は想定より底堅いという見方を裏付けるものとなる。

(3)先週までの相場の推移

先週(4/24～4/28)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2388 高値 1.2583 終値 1.2569

(対円) 安値 165.43 高値 171.18 終値 171.11



4. 豪ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 大橋 開

(1) 今週の予想レンジ: 0.6580 ~ 0.6705 89.50 ~ 91.40 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、一時反発するも下落。24日、日銀高官発言、米経済指標結果等から往って来いの展開。0.6690でスタート後、植田日銀総裁の発言から現行の金融政策維持を示唆する発言が好感され、日米金利差を意識した円売り・ドル買いが進行し、0.6666まで下落。その後は、米4月ダラス連銀製造業景気指数の結果が市場予想を大幅に下回ったことで、米金利低下・ドル安・豪ドル高となり、0.6696でクローズ。25日、中国景気後退懸念から大幅に下落する展開。豪州祝日の中、0.6703でスタート後、週高値0.6705を瞬間的につけるもコロナ感染再拡大の可能性が中国景気回復の足かせになるとの思惑から軟調な中国元の動きに追随する形で下落。26日、豪1~3月期消費者物価指数(CPI)の結果、米地銀関連報道等から下落する展開。豪3月CPI・豪1~3月期CPI共に前回値を下回ったことで、次回RBA理事会での政策金利据え置きが意識され、上値が抑えられて推移。NY時間、米中堅銀はFRBが設けた金融貸出制度へのアクセスが制限される可能性があるとの報道に反応し、金融株中心に下落、豪ドルも追随する形で0.6952まで下落。27日、豪起債・米金利の動向が意識され、もみ合いながらも上昇。0.6608でスタート。豪州市場での起債動向が意識され豪金利は上昇し、豪ドルは0.6635まで上昇。NY時間では、米経済指標結果からインフレリスクが意識され、米金利上昇・ドル買いとなり豪ドルは0.65台まで下落。引けにかけては、米金利上昇圧力が弱まったことで次第に戻し、0.6630でクローズ。28日、0.6632でスタート。日銀が大規模な金融緩和策を維持することを決定、日米金利差拡大が進むとの思惑から円売り・ドル買いが進行し、豪ドルは週安値0.6573を付けるなど、下落。その後は月末買いにより米金利低下圧力がかかり、次第に下落分を取り戻す展開となり、0.6617で越週した。

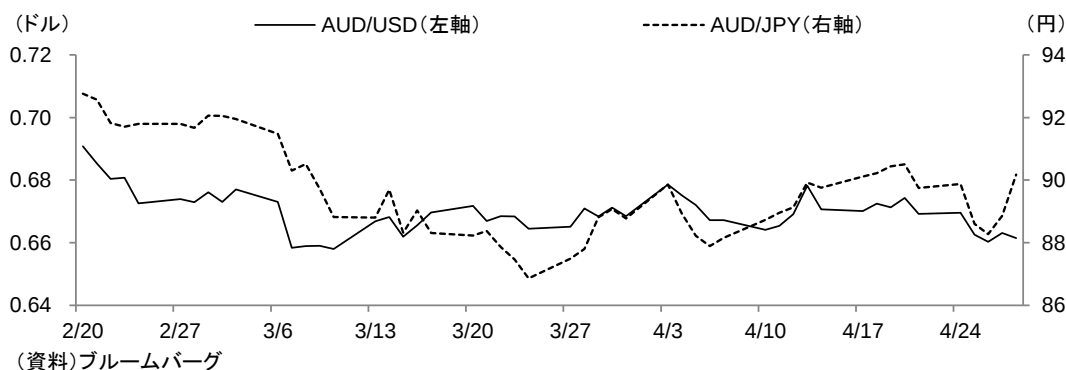
今週の豪ドル相場は、小幅下落する展開を想定。来週の主な注目点は、RBA・米債の動向である。まず、RBAに関しては政策金利据え置きを予想する。4月RBA理事会を振り返ると、ロウ総裁は政策金利据え置きの理由について”経済見通しとこれまでの利上げの影響を見極めるための時間が必要”と述べている。また、4月12日にブロックRBA副総裁は、”コロナ禍で拡大した当初固定型住宅ローン金利の影響でラグが過去と比べて長くなっている可能性”に言及している。斯かる中、直近発表された豪3月CPI:+6.3%(市場予想+6.5%)、刈込平均CPI:+6.6%(市場予想+6.7%)などいずれもインフレ圧力が弱まっていることが示唆されており、利上げまで時間的猶予があると考えられる。足許市場の利上げ織り込みは、約+2bp程度しか織り込まれていないため、据え置きの場合、小幅下落にとどまると考えられる(ただし、予想に反して利上げを実施した場合の値動きには注意)。一方で、特に警戒したいのは、米債の動きである。米10年債は新年度に入り3.3%近辺では跳ね返されており、足許債務上限問題が燃えているものの、米地銀に関する懸念が改善してきている中では米金利上昇余地(ドル高・豪ドル安)に要警戒。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/24~4/28)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6573 高値 0.6705 終値 0.6617

(対円) 安値 87.87 高値 90.22 終値 90.17



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。